

書 評 B O O K R E V I E W

『理系のための楽しい研究生生活』(坪田一男著)

Dr. TSUBOTA'S "GOKIGEN" Research Life 1996-2005



- A5 判, 312 頁
- 定価 2,940 円
- 医歯薬出版

『理系のための楽しい研究生生活』は、慶応義塾大学医学部坪田先生(“GOKIGEN”氏)の10年に渡るエッセイ集である。彼は、まだ50歳になったばかりで、これは中締めで、全仕事が終わられるのはずっと先のことである。

研究という言葉から何を想像するだろうか？理系の場合、暗い研究室で、擦り切れた白衣を着て、しかつめらしい顔をして、実験をしている研究者の姿が定番となっている。いつからこのような姿がイメージされるようになったのか。研究者に限らず、小説家のイメージもしかり。わが国では、漱石や芥川、あるいは太宰、みんな仕事をするとき辛そうである。バルザックのように、“あたかもパンをたべるように”小説を書くというバイタリティに、われわれはどこかしら欠けている。

小林秀雄は、もっとも自分の気持ちに沿うのは、喜怒哀楽の感情のなかで悲しみであると言い切る。楽しいことはうつろいやすく、悲しみ/哀みのなかにこそ、人生の真実があるという。それゆえか、われわれは、あるいは少なくとも私は、論文を書くときなど、「レクイエム」などを聴きながら、気持ちを沈めて書く。

しかし、こうしたことは、日本人独特の先入主かもしれない。この本を著した“GOKIGEN”氏

は、人生を機嫌良く過ごすことが最重要と考える。彼の目を通して語られるせいも、本人のみならず、その周辺の人々も明るいヒトばかりである。しかも、“GOKIGEN”氏は、病院や研究室にだけでなく、患者さんを診察し、本を書き、クルージングをし、マラソンをし……ときわめて多様な活動をする。第49話には、「ごきげんに生きるという戦略」が述べられている。彼は、「なにかがうまくいったからご機嫌というのではなく」、心の持ちかたとして、あるいは、事に処するにあたり、上機嫌でいたいと考えているという。これは、とても意味の深い言葉であると思う。

眼科学教授になったとき、彼は、世界レベルのEye Research Centerをつくろうと考える。日本はアメリカとは体制が違うのだから、所詮、教授20~30人もいるセンターは無理、とは考えずに、“まねっこ”をしよう、挑戦しようとする。しかし、その挑戦は着実なもので、研究や教育を一步步引き上げ、診療を大事にしていこうという極めてオーソドックスなものである。本書に書かれた、論文作成、学会の参加の仕方、講演、留学、どれをとっても、人生楽しくやろうではないかという空気にあふれている。たとえば、学会は、学術活動もさることながら、人と出会う場であり、パーティーは無理しても出ようとか、講演は楽しくしよう、などの指摘は的を射ていると思う。

私自身、“GOKIGEN”氏と話していて、なんと楽観的で、屈託のないヒトかと思う。しかし、彼は周囲には、十分な気を遣っている。それでも、余りに活発に活動するものだからずっこけもする。そのとき、驚くほど率直に軌道を修正する。恐らく彼の行動規範は、“すなお”ということに尽きるのではないだろうか。

これを読まれる人は、サプリを何十錠も飲んだり、120歳まで生きようとアンチエイジングに努めたりというそんな著者のまねをする必要はない。読み終わった後、にやりと笑えたら、それでいいと思わせる本である。

(慶応義塾大学医学部発生・分化生物学講座、
須田年生/すだとしお)